

博士学位論文審査結果の要旨

| | | | |
|---------|------------------------|--------|---|
| 学位申請者氏名 | 尾立 要子 | | |
| 論文題目 | 周辺からの共和主義：エメ・セゼールとフランス | | |
| 論文審査担当者 | 主 査 | 戸田 真紀子 | ㊞ |
| | 審査委員 | 松下 洋 | ㊞ |
| | 審査委員 | 松田 哲 | ㊞ |
| | 審査委員 | 松本 充豊 | ㊞ |

本博士論文の目的は、フランスのミッテラン政権[1981-1995]が行った海外領土の再編に対して、エメ・セゼール[1913-2008]が果たした役割を明らかにすることである。

セゼールは、カリブ海のフランス領マルティニーク出身の詩人であり、思想家であり、政治家であった。フランス語詩人であるセゼールの作品は30カ国語以上に翻訳され、代表作である『帰郷ノート』は、黒人詩人の眼差しで「ニグロ」の集団としての来歴と個人として生きる姿を謳い上げた長編叙事詩である。アフリカを文明化の対象としてしか見ようとしないフランス帝国に対して、文化的同化主義への抵抗であり、黒人の尊厳回復を求める「ネグリチュード(黒人らしさ、黒人の意識の覚醒)」思想をセネガル初代大統領サンゴールらとともに提起した。そして、第二次世界大戦後は、反植民地主義にたつ政治家（フランス国民議会マルティニーク選出議員：1945年-1993年、フォール・ド・フランス市長 1945年-2001年）として評価された。2008年に94歳で亡くなった時は、マルティニークで国葬が営まれ、当時のサルコジ大統領も出席した。

フランス共和国は、フランス本土(コルシカを含む)に加え、海外領土として、海外県及び海外州(DROM)と、海外自治体(COM)を有する。現在では、海外県は、フランス本土の県と全く同じ地位で扱われ、本土の法律と政令が同様に適用されている。
*本博士論文では、分析対象とする時期にあわせて、旧来の名称である「海外県」(DOM)と「海外領」(TOM)が用いられている。

****1946年3月19日の法律が定めた海外県(DOM)**

大西洋：グアドループ諸島、マルティニーク島、仏領ギアナ

インド洋：レユニオン島

(2011年からインド洋のマヨットが加わり、2015年12月現在5県存在する)

*****1982年12月31日の法律による海外州(ROM)**

上記の 4 地域に関して、80 年代に自治体海外州法制化を経て、海外県及び海外州 (DROM) と呼ばれる。

****2003 年 3 月の憲法改正により、第 72 条の 3 第 1 項に、「共和国は、自由、平等、博愛の共通の理念に立脚し、海外地方団体の住民をフランス国民の中に包含する」という規定が加えられた。

第二次世界大戦後、「アフリカの年」に代表されるように、多くの植民地が独立していったが、「脱植民地化＝植民地に主権を与えて独立させること」としたイギリスとは異なり、フランスの脱植民地化は、主権を与えた国があるものの、一定程度の自治権を認めながらフランス領の一部として扱う海外領を維持し続けた。このことについて、尾立氏は、ロビンソン・ギャラハーの自由貿易帝国主義論を批判的に検討し、フランス型自由貿易帝国主義とも呼べる枠組みの中で、セゼールをコラボレーターと位置付けている。

「海外県」の端緒はギアナ、グアドループ、レユニオンとマルティニークが県に分類されることを定めた 1946 年 3 月 19 日の法律に見出されるが、セゼールはその法案報告者だった。海外県は法的には植民地ではない。フランス領アンティルの海外県(グアドループ、マルティニーク)において「入植者天国」の状態に変化がみられたのは、1981 年以降であり、かつて奴隷貿易と奴隷制によるモノカルチャー植民地だったこれらの海外県の導入に伴って解決が期待された不公正と不平等の問題は、セゼールの期待に反して、フランスの国内問題として扱われてこなかった。

1981 年以降のミッテラン政権の分権化政策には、セゼールの意見がかなり反映されていたというのが、本博士論文の主張である。セゼール本人は言うに及ばず、ミッテラン政権の首相をはじめとする政府要人へのインタビューと文献調査を重ね、「フランスとの共存」を前提とするマルティニークの政治家セゼールが、「多様性への賭け」に出たミッテランの政策にどのように影響を与えたかを尾立氏は明らかにした。

さらには、海外県の創出と再編に関わったセゼールにとって、「海外県」は彼が構想していた海外県ではなく、歴代政権は、反植民地主義の象徴として世界から敬愛されるセゼールを利用して、「海外県」という名のもとに、「入植者天国」である非公式の「植民地」を維持し続けようとしたのだという尾立氏の解釈は、セゼールが海外県の生みの親であるとする従来解釈を真っ向から否定する研究として、審査委員一同から高く評価された。

審査員一同は、尾立要子氏の論文が現代社会研究科公共圏創成専攻の博士論文に値すると判定した。